

礼拝における現代的音楽の可能性
(東北学院大学キリスト教文化研究所主催研究フォーラム)

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2023-09-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松田, 牧人 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/2000009

研究フォーラム

礼拝における現代的音楽の可能性

松田牧人

皆さんこんにちは。よろしくお願いたします。今ご紹介いただきました、利府キリスト教会の牧師の松田牧人と申します。学内の礼拝で説教（奨励）をさせていただくことは多いのですが、このような研究フォーラムでお話をさせていただくのは初めてです。拙い話になると思いますが、お付き合いいただければ幸いです。

私は文学部基督教学科卒（現総合人文学科）で、父親も同じ学科の卒業生でしたので、親子で同じ先生にお世話になりました。懐かしい思い出が多くあります。当時、デイビッド・マーチー先生に卒論の指導をしていただき、先生は優れた音楽家でもあられたので、今の私の関心にもつながる礼拝と音楽についての学びをさせていただきました。真剣に勉強をしていたつもりですが、フォークソング愛好会に入り、バンド活動にも全力投球をしておりました。大学卒業後は、教派神学校に進み、23年ほど前に利府キリスト教会に着任しました。

私どもの教会は「日本バプテスト同盟（JBU）」というグループに連なっております。これは、日本基督教団と同じく日本キリスト協議会（NCC）に加盟する、全国で65ほどの教会からなる小さな教派です。仙台ですと尚綱学院、横浜では関東学院などが、私共の教派から生み出されています。

私たちのグループも、日本の多くの教派教団の例にもれず、ほとんどの教会が深刻な高齢化、教勢の停滞を経験しています。しかし、そのような中であって私どもの教会は多少様子が違います。利府町も今では仙台市のベッドタウンとして以前よりも発展しましたが、それでも、JRの電車が1時間に1～2本しか来ないような田舎町で、昔は貧しい農村でした。そこにある私どもの教会の礼拝に毎週70名ほどの人々が集っています。コロナ禍の前ですと平均100名近くが集う年もありました。また、出席者の平均年齢がおそらく40歳台であると思います。全国的な平均からみるとかなり若い教会と言えます。

私が着任したのは1999年ですが、その時にはわずか16名の方々が総会を開いて私の招

聘を決断しました。当時の教会はいろいろと困難を抱えており、「閉鎖するしかないのでは」という声も聞こえていたほどでした。そのような中で牧師としてのスタートをさせていただいた私は、最初は右も左も分からず、ただただ無我夢中に良かれと思うことを手当たり次第にやりました。欠けが多く、失敗の多い歩みでしたが、しかし、神様の導きによって教会は徐々に元気を取り戻し、教勢の上でも3倍、4倍の成長を経験してきました。

そこにはいろいろな要因があったと思いますが、その一つとして、現代的な音楽を礼拝の中に取り入れたことがあると思っています。後で詳しくお話ししたいと思いますが、急にすべてをガラッと変えたわけではなく、教会の皆さんと対話をしながら、考えながら、祈りながら、徐々に礼拝の中で『讃美歌』以外の新しい賛美の曲を用いたり、ギターやキーボード、ドラムなどの打楽器を取り入れた賛美を用いるようになってきました。

ちなみに今日用いる「現代的な音楽」という呼び名は、クラシック音楽史上の「現代音楽」といったものではなく、より便宜的なものです。すべての音楽スタイルが生み出された時、それはその時代においては新しく、当時の“現代音楽”であったわけです。あくまでも21世紀前半に生きる現在の私たちから見たところの最近のキリスト教音楽（Contemporary Christian Music）という意味で、この言葉を用いたいと思います。まずは、少し歴史のお話をさせていただきます。

<現代的な礼拝音楽の歴史概略>

1) 1960年代後半～70年前半のジーザス・ムーブメント（Jesus Movement）

アメリカの西海岸を中心に起こったイエス革命とも呼ばれる運動があります。最近これをテーマにした映画『Jesus Revolution』が制作されたという話を聞きましたが、派手な格好をして反体制的な主張を行い、共同体形成をしていた若者（ヒッピー）たちが、次々に回心をしてキリスト者となった一つの大きな運動でした。そして、この若者たちの多くは既存の伝統的な教会のあり方に自分たちを合わせるよりも、彼らの持っていた文化を教会に持ち込んだり、あるいは、彼らの文化に適合する教会を新たに生み出しました。その当時に生まれた教会のあるものは大きく成長し、メガチャーチなどと呼ばれて、何千人単位の人々が毎週集うような教会として今も存続しています。この人たちはまさにギターをかき鳴らし、ドラムのビートに合わせてながら、自分たちの新しい歌を生み出して、彼らの信仰表現をしたわけです。従来オルガン伴奏による会衆賛美ではなく、フォーク、ロック、ポップスなどの音楽スタイルで神様を讃えることを始めたということです。

2) コンテンポラリー・ワーシップ (Contemporary Worship)

ジーザス・ムーブメントの中で生み出された、スピリチュアルソング、プレイズコラールなどと呼ばれる短い曲が発展し、1970年代後半以降は、プレイズ&ワーシップ (Praise&Worship) などと呼ばれる現代的な会衆賛美曲が多く生み出され、これが礼拝音楽の一つのジャンルとして市民権を得るようになります。非典礼的でコンサートのような礼拝が徐々に広まり始めました。

3) ワーシップ・ウォーズ (Worship Wars)

しかし、教会の中では、本当にこのような現代的な音楽を教会音楽として認めてよいのだろうかという論争が起こります。伝統的な讃美歌とこれらの新しいスタイルの賛美とは、どちらも同じ神を称える音楽として認められるべきものなのだろうか。こういった論争も随分となされましたが、少なくとも北米の教会では徐々にこの新しいスタイルの賛美が珍しいものではなくなります。

4) カリスマ派、ペンテコステ派から、あらゆる教派へ (日本においても)

当初、これらの現代的な礼拝スタイルは、聖霊による癒やしや異言などを強調するカリスマ派、ペンテコステ派と呼ばれる運動の専売特許であるかのように思われていましたが、徐々に福音派、主流派、カトリックの中にもこのような音楽が広まってきました。先日行われた聖公会の第15回ランベス会議においても、バンドでの奏楽を伴う現代的な賛美が用いられているのをYouTubeで見まして、私は改めてこのことを実感しました。

日本においては、戦前に宣教師たちが紹介した礼拝スタイルをそのまま踏襲している教会が圧倒的多数であると思われるのですが、それでも従来に比べると現代的な賛美に対する抵抗感は弱まっているように思われます。

5) 音楽ジャンル、音楽産業の一部となる

コンテンポラリー・ワーシップは、この米国の音楽産業においてある一定の市場規模を持つ音楽ジャンルの一つとなっています。先週まで、私はテネシー州のナッシュビルなど、アメリカの南部に行っておりました。この街は全米の音楽産業のメッカといいたいでしょうか、そういう場所ですが、クリスチアンの音楽家やレコード会社なども随分多くこのナッシュビルを拠点としています。

ワーシップ・リーダー (礼拝指導者)、ワーシップ・パスター (礼拝担当牧師) などと呼ばれる人々が、専門家として教会に雇用されたり、中にはバンドを引き連れて全米や海

外にまで集会のツアーをしたりすることも起こっています。

次々に新しい曲が発表されるものですから、一つの楽譜集にまとめるといったことは不可能で、礼拝や集会では歌詞だけをスクリーンに映し出して会衆賛美をします。一般的なプレゼンテーションのソフトである PowerPoint などよりもさらに教会の礼拝・集会に特化された専門のソフトが販売されていたり、教会のために音楽著作権を管理する専門の会社があったりします。これは、日本とはだいぶ状況が違います。

スクリーンを見て歌うということは、顔を上げて歌うことができます。また、手に何も持たずに歌うことができますので、手拍子をしたり、教会によっては手を上にあげて歌ったりします。また、演劇や即興の絵画、ビデオクリップなど、クリエイティブアーツと呼ばれるようなものを礼拝に取り入れることも見られます。

このような礼拝を導くのは一般的にワーシップリーダーとワーシップバンドです。後で映像を見ていただきますけれども、一人の司会者が進行していくとは限らずに、3人～4人が入れ代わりながらリードしていくスタイルもあります。今回の旅行でいくつかの教会やクリスチャンの集会を訪ねましたが、どこでもこのような音楽が用いられていました。

<音楽“スタイル”は従属的なもの>

世の中にはいろんな音楽のジャンル、スタイルがあるわけですが、それぞれの価値に優劣はなく、どれが正しくてどれが間違っているということはないと私は考えています。先ほど椎名先生がお話くださった内容を「アーメン、私も同じ思いです」と感じながら伺いましたが、やはり「詩編と賛歌と霊的な歌によって語り合い、主に向かって心からほめ歌いなさい」と言われるように、どのような歌詞で、どこに向かって歌われているかが重要です。また、どのような心の姿勢、どのような生き方の態度をもって捧げているかが重要です。

音楽のスタイルも、テクニックも、その習熟は、もちろん重要ですが、それでもこれらのものは「神学」「歌詞の意味、そこにあるメッセージ」に従属するものであると私は考えます。

ですから、私たちはこのような現代的な音楽スタイルの賛美を積極的に用いていますが、「あれか、これか」「讚美歌か、プレイズか」という考え方をしているわけではありません。どこに向かって、どんな内容を歌っているかが最も重要であると考えているわけです。では、少し映像を見ていただきましょう。

※映像（アメリカ南部で訪問した教会、集会、日本における現代的な賛美の集会など、多様な賛美の様子を紹介）

さて、今日は私たちの教会のワーシップバンドのメンバー（キーボード、ギター、ベース、カホンという打楽器）にも来てもらっているのです、短い時間ですが皆さんと歌ってみたいと思います。

皆さんの中で、このようなプレイズ & ワーシップに日常的に触れておられる方はどのくらいいらっしゃいますか。ちょっと手を挙げてみていただけですか。何人かおられますね。ありがとうございます。その方々をご存知の曲だと思います。1984年作曲ですので、このジャンルの中ではもうすでに“クラシック”といっても良い曲です。最新のものはちょっと刺激が強すぎるかと思ひまして控えました（笑）。これは、マーティー・ナISTRAM (Marty Nystrom) というアメリカのワーシップリーダーが、詩篇42篇に基づいて作詞作曲した『鹿のように』(As the Deer) です。ご存知の方はどうぞ一緒に歌ってください。馴染みのない方は、最初お聴きになりながら、なんとなく口ずさんでいただけたらと思います。

よく「楽譜はないんですか?」と尋ねられますが、多くの場合、楽譜は用いずに初めての歌も歌詞だけを見て、ワーシップリーダーの歌うのを聞きながら徐々に覚えていくという形をとりますので、今日はそれを試してみましよう。

※利府キリスト教会のワーシップバンドによる、現代的な会衆賛美の実演

このように、キーボードが後ろで静かに奏でられている中でワーシップリーダーが会衆に語りかけたり、聖書朗読をしたり、祈ったりすることもよく行われます。礼拝全体が細切れではなく、一つの流れでつながっているような感じで、それを音楽が支え、導いているイメージです。

<礼拝における言葉>

さて、先ほどの話と重なりますが、「意味が分かる」ということは不可欠です。現代的な「音楽」を用いることよりも、現代的な「歌詞」を用いることに力点があります。音楽が従属的であるとするならば、やはり「言葉」が支配的なものなのです。

少し「言葉」の話を見せていただきますが、たとえば、1954年版の『讃美歌』312番の

『いつくしみ深き』には「などかは降ろさぬ」という歌詞が出てきます。今の若い世代、大学生たちがこの言葉の意味を自然に理解できるかという点極めて難しい。我々大人にとっても、文語の歌詞の意味は結構難しいと思うのです。ちなみに、これは「どうして降ろさないのだ」という意味ですが、もし、歌っている会衆がその歌詞の意味を理解せずに歌っているならば、極端な話、お経を唱えたりマントラを唱えたりしているのとあまり変わらないことになってしまいます。もちろん、文語の何とも言えないリズムの良さ、格調の高さというのは私も大好きです。私も教会で育ち、慣れ親しみ、意味も分かっていますから自分としては文語の讚美歌でも問題ないのですが、しかし、教会の外にいる方々に福音を伝えていくことを考えると、どんなに格調高く美しい歌詞であっても、意味が伝わらないというのは問題です。

267番『神はわがやぐら』はどうでしょうか。「よみのおさ」と言われてピンとくる人たちがどれくらいいるだろうか…。「あまつ、おおかみ」と言われて、子どもが「狼」と間違えて泣いたなんていう、本当かどうか分かりませんが、そんな笑い話を聞いたこともあります（笑）。

歌詞に限らず、礼拝全体の中で用いられる言葉を「意味の通じる（分かる）ものにする」ということは、特に伝道を考えるときに大変に重要であると私は考えています。

教会音楽からは話題が離れますが、司会者（ワーシップリーダー）や説教者がどんなボキャブラリーを用いているか、皆さんは検証してみたことがおありでしょうか。私たちの教会では、司会者の方々のためのトレーニングをしました。礼拝のビデオを皆で見ながら検証するという作業をしたこともあります。そこではまず、自分たちが司会を担当するときどんな言葉を用いて祈っているかを振り返ってみました。そして、それらの言葉を、例えばクリスチャンでない家族や職場の同僚などがどれくらい理解できるかを考えてみました。

ある方はこのように祈っていました。「ご在天の父なる御神様（おんかみさま）、今朝（こんちょう）も敬愛します兄弟姉妹らと共に御堂（みどう）に集い、聖なる御名を崇めることのできます幸いを感謝申し上げます。」と。

キリスト者としての歩み、教会生活が長い方々は、ほとんど問題なくこの祈りの意味を受け取ることができるでしょうし、「本当にそうだな、アーメン」と心を合わせることがおできになると思います。しかし、この東北学院に学んでいる大学生たちはどうだろうか、また、皆さんの教会の周りに住んでおられるキリスト教的背景をお持ちでない方々はどうだろうか。このような方々が日本では人口のおそらく99%を占めるわけですが、このことを真剣に考えたいと思うのです。

「ご在天」というのは天におられるということで、その意味するところは素晴らしいのですが、普通の人は「ございてん」ってなんだろうと思うわけです。「おでんの具の一つかな？」なんて考えたりする（笑）。「おんかみ」だとか「こんちょう」だとか、普段使わない言葉を用いなければならない理由はどこにあるのだろうか、それを問い直す作業を私たちの教会は行いました。「みどう」と言わず「礼拝堂」とか「この場所」と言っても良いのではないかと…。教会は神の家族であり「兄弟姉妹」であり、その実質は極めて重要だけれども、教会員同士が「～兄弟」「～姉妹」と呼び合う必要があるかどうか…。教会に初めて足を踏み入れた人々にそれがどう聞こえるか…。

私がお伝えしたいのは、こういったことを教会として「問い、考える」というプロセスが大事だということです。吟味した結果、「従来どおりの言葉遣いを敢えて選ぶ」ということになっても一向に構わないと思っています。しかし、もし教会が問い直す作業を怠り、思考停止に陥り、内側にいる者たちが慣れ親しんだ、自分たちにとって心地の良いあり方にただ安住し続けてしまうなら、地域や次世代への伝道はほとんど不可能と言っても良いのではないかと私は思います。

私たちの教会の場合は、礼拝の中で使う言葉遣いを思い切ってわかりやすいものに改めるとことをしました。キリスト教学校の生徒・学生たちにとっても、教会の礼拝に来た時に「ここでボクたちに関係のあることが行われている」と感じられるような、そういう礼拝スタイルを目指したというところがあります。

<礼拝（信仰）と現実生活との関連性>

教会における現代音楽の意義ということに話を戻しますが、これは、礼拝あるいは信仰というものと現実生活とが分離されているのではなく、繋がっているということを表現するものでもあると思っています。先程の言いましたが、日本の教会が、明治時代の宣教師たちから学んだ礼拝のスタイルを真面目に守り続けている中で、社会全体はものすごく変わっているわけですよ。文語体を使う場面が生活のどこにあるだろうか。スマホ一つでいろんなことが完結する時代になり、大学生であればおそらく Bluetooth で接続したワイヤレスイヤホンで音楽を聴いている。もはや、私たちが学生時代に全盛であった CD も過去のものになり、CD を再生する機器を持ってない子たちのほうが圧倒的多数になっています。その代わりに、YouTube や TikTok, また、音楽の聴き放題サブスク・サービスが一般的になっている。そういう世代にどうやってこの素晴らしい聖書の福音を伝えていくか、これを真剣に考えたいのです。

キリスト教信仰があまりにも現実生活とかけ離れた他国の宗教であるとか、あるいは歴史上の遺物のように見えてしまうということについて、私たちは真剣に考え、悩み、祈り、自分たちを変える勇気を持たなければならないのではないかと思います。

もちろん、すべての教会が、中高生や大学生をどんどん惹きつけるような働きをしなくても良いと思います。30代でも40代でも良いし、高齢の方々でも良いのですが、いずれにせよ、このキリスト教的文化の希薄な日本で生きている「普通の人たち」が何に興味を持ち、何を心配し、何に悩み、普段どんな言葉遣いをし、どういうメディアやエンターテインメントに触れているのかということなどを意識しながら伝道を考え、教会の礼拝のスタイル・表現を工夫していく。

別に媚を売る必要はないし、神礼拝の本質や福音の内容は決して捻じ曲げてはなりません。でも、「この救い主はあなたの人生に関わりがあるんです!」というメッセージをどのようなアプローチで伝えるべきか、それを宣教学的な視点で考えることは極めて重要であるとわたしは考えています。

<現代的な教会音楽の課題とその克服>

これまで積極面についてお話してきましたが、しかし、この現代的な教会音楽や礼拝スタイルが無条件に良いものであるということをお話ししたいわけではありません。実は、いろいろと課題もあります。

短い曲を繰り返し歌うということが多く行われてきましたが、歌詞を見てみると随分と浅薄なものがあります。あるいは、これは本当に聖書に根ざしたものか、と疑問符がつくようなものも少なくありません。現代は、自分の作品を自由にYouTubeなどで発表できますし、そこからある曲がヒットすることもあります。まあ、若者たちは「バズる」というような言い方をしますね。ところが、そのヒットしている、バズっている曲の歌詞を見てみると、どうも神学的に問題があるといった場合もあります。

こういった問題を踏まえて、その課題を乗り越えていこうとする方々も出てきています。これは2010年代のモダン・ヒム・ムーブメント（現代讃美歌運動）というものですが、聖書の豊かな教えを含蓄した神学的に重厚な歌詞を重んじ、それを現代的なリズムや楽器編成で歌うというものです。楽曲も、伝統的な讃美歌とポップスが統合されたような雰囲気があります。

このムーブメントの主導者の一人が、キース・ゲティ（Keith Getty）という北アイルランド出身の、私と同世代のワーシップリーダーです。この方は、「文化的妥当性を追求す

るあまり、現代の賛美音楽が人々を脱キリスト教化している」「偉大な賛美歌と呼ばれるものの75%以上が、永遠、天国、裁き、そして神との平和などの神学的テーマについて語っているが、しかし、現代の賛美歌で永遠について歌っているのは5%以下である」などと指摘しています。

また、「感情の高揚」が礼拝において主たる目的になってしまう危険も指摘されています。感情それ自体は、神様からの大切な贈り物であると信じていますが、それが礼拝の中心では決してありません。

それから、このような現代的な賛美においては、奉仕者の確保、育成の難しさという課題もあります。先程歌ったようなスタイルで賛美をしようと思っても、「私たちの教会にそういう人はいません」という話で終わってしまう。

ただ、これについて一つ参考までにお話ししますが、先週の日曜日、私はテキサス州のある小さな開拓教会を訪問しました。25人ほどが集まるその礼拝には一人もオルガンやピアノを弾く人がおらず、ギターができる人もいませんでした。どうやって賛美をしていたと思いますか。彼らは、賛美のカラオケを用いていました。日本にもヒムプレーヤーというものがありますが、そこでは、伴奏の音楽と共にバックコーラスも録音されたものが流れ、歌詞は礼拝堂の前にあるスクリーンに出てきます。二人の方が立ってマイクを持ち、その伴奏にあわせて歌いながら会衆賛美をリードしていました。これは教会用に作られた賛美カラオケ動画で、アメリカではそういったものを販売するサイトがあって、そこから購入・ダウンロードして手軽に用いることができるようになっています。日本語でも、ブレイズ&ワーシップの曲はかなりYouTubeなどで見つけることができますし、ミクタムというゴスペル音楽会社の「M Worship Project」などでは教会の礼拝で利用するための賛美動画を配布しています。奉仕者の十分でない小規模の集会でも、こういったものを用いることが十分可能だと思います。

そして、現代的な教会音楽の課題として最大のものは、それが教会内に文化的な闘争を引き起こす可能性があるということです。この取り組みをしながら感じてきたことですが、誰もが新しいものに対する恐れを持っています。「知らない」「やったことがない」「見聞きしたことがない」ということが、即、拒否反応につながることも往々にしてあります。新しいスタイルを紹介しようとする者たちは、配慮と愛をもってする必要がありますし、知恵が必要です。

私は自分自身、その面において十分でなかったと思っていますが、教会員の皆さんの忍耐強さ、心の広さに助けられてここまで歩んでくることができました。そして、現在、長年教会を支えて来られた先輩世代の信徒の方々と共に若い世代の人々が心から生き生きと

神様を賛美し、聖書のメッセージを皆が自分に関わりのあることとして味わうことが起きている教会の姿を目の前で見る幸いに与っています。

<未来に向けて変わっていく>

私が着任した当初、私たちの教会も54年版の『讃美歌』を主に用いていました。私も小さい頃からこの『讃美歌』で育ちましたので、大好きな曲がたくさんあり、これを歌って心から神様をほめたたえることができます。けれども、先ほど申しました通り、次の世代の人たちを教会につなげる上でこのままでは難しいと考えました。それで新しい賛美、新しい礼拝スタイルを導入したいと考えたわけですが、当然、先輩世代の方々にとっては違和感があるし、拒否感が出てくるわけです。何度もお叱りを受けたり、要望を受けたりしました。その度に私は、教会の大先輩たちと何度も対話をしました。どんな話をしたかという、どの賛美が良いとか悪いとか、正しいとか間違ってるという話ではありません。好きとか嫌いとかいう話でもありません。そうではなく、10年後、20年後、30年後の教会を思い浮かべてみましょうとお話ししました。「いやいや、先生、私はそんなに長く生きていられません。10年後には天に召されていますよ」と仰る方もいましたが、「天に召された後の教会を思い浮かべてみてください」と…。そうすると、皆さん口を揃えて、孫たちやひ孫たちの世代が喜んで集っている教会だったら嬉しいなと仰るのです。と同時に、そこには痛みも見て取ることができました。それは、なかなか信仰継承がうまく行かず、子どもたちや孫たちが教会に寄り付かなくなってしまうという痛みでした。このまま教会が高齢化し、次世代が導かれることがなければ、自分たちが天に召される時、誰が葬儀で讃美歌を歌ってくれるんだろうという話も出ました。

「みなさん、次世代、次々世代が嬉々として集う教会を作りたいと思いませんか?」「先生、そうですね。でも、それはどうやって?」

そんな会話をする中で、信徒の皆さんが徐々に教会の変化を自分たちに関わりのあることとして考えてくださるようになってきました。「先生、私たちに何ができるんでしょうか?」と問われて、私がお話し申し上げた一つの話はこういうものでした。

「一つ、新しい奉仕の形があります。それは『我慢』という奉仕です。若者たちの捧げる賛美が皆さんにとって耳障りな時も、耳栓をしていても良いので、ニコニコしながら見守ってもらえないでしょうか。彼らのファッションや言動が皆さんから見て違和感を覚えるようなものだったとしても、彼らがキリストにつながり、教会につながるために、静かに暖かく見守ってもらえないでしょうか。神様は、皆さんのそういう『我慢』を用いてく

ださると思うのです。」とお伝えさせてもらいました。

どんな反応が返って来るかな、とドキドキしたのですが、何人かの人から「先生、本当にそうだね」と応答してくれました。当時の信徒の中には、お一人の元牧師がおられて、他の教会で何十年も良い働きをなさって引退された方でした。このA先生から見たら、二十代の私は危なっかしく、いろいろと気になるところもあったと思うのですが、この大先輩が教会全体に呼びかけてくださり、「未来に向けて教会が変わっていかうとする、この取り組みを全力で応援しましょう！」って。そのことを私は忘れることができません。

そんな尊敬すべき協力者、謙遜で柔軟な心を持つ理解者たちに支えられて、私たちの教会は礼拝や様々な集会の持ち方、群れの在り方、宣教の形を少しずつ変えて来ました。

変化することそのものが目的ではありません。新しいものであれば良いという話でもありません。教会が、神様から与えられている使命に生きているかどうかが問題です。もし、私たちの属する教会が内向きになり、その中にいる者たちだけの居心地の良さを重んじているならそれは問題です。

「すべての人に対してすべてのものになりました。何とかして何人かでも救うためです。福音のためなら、わたしはどんなことでもします。」(コリントの信徒への手紙第一 9 章 22 節 b-23 節 a)

<キリスト教学校における現代的な教会音楽の可能性>

これについては青山学院での先進的取り組みが動画にまとめられているので、これを観て終わりにしたいと思います。学内の礼拝に学生たちが主体的に関わって、とても生き生きとしているのが印象的です。東北学院の礼拝の中でもいろいろと新しい賛美の形を模索していけると良いですね。ありがとうございました。

※青山学院大学におけるコンテンポラリー礼拝の動画を皆で鑑賞

(これは、10月15日(土)に行われた研究フォーラムでの講演文字起こしに加筆・修正を行ったものです。)